



(萩)

萩城は関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏によって、防長移封後の慶長一三年（一六〇八）に建設された。外堀は遅れて元和八年（一六二二）に完成している。東側の外堀では当初堀幅二〇間であったが、その後町屋の進出や土砂の流入により一四間に狭まり、さらに堀底の上昇により洪水の危険が生じ舟の通行にも支障を来したため、元文四年（一七三九）に藩は堀の機能を回

山口・萩城跡（外堀地区） はぎじょう

- 1 所在地 山口県萩市北片河町
- 2 調査期間 一九九七年（平9）五月～一九九八年一月
- 3 発掘機関 山口県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 谷口哲一・林 信行・井川隆司・吉野祥子
- 5 遺跡の種類 城下町跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

復するため堀を浚渫し、その土砂で外堀の東端を埋め石垣を築き、堀幅八間とした。埋め立て地には新たに町屋が成立し、「北片河町」、「南片河町」となった。

今回の調査地は、この東側の外堀に沿った地域にあたる。この地域において道路改修が計画され、その事前調査として萩市教育委員会がトレンチ調査を実施してきたが、一九九七年度は山口県埋蔵文化財センターが、北片河町の一部（二四〇〇㎡）を対象に発掘調査を実施した。その結果、堀幅八間の時期の町屋跡が確認された。主な検出遺構としては、石垣・石列・石段・排水溝・礎石建ち建物・埋甕・井戸・廃棄土坑がある。遺物は八万点以上あり現在整理中である。

木簡は一八世紀の廃棄土坑であるSK八〇から八点、SK九二から二一点、計二九点出土した。判読できる木簡は一点あるが、今回はこのうちのSK八〇出土の二点について紹介する。木簡が出土したこれらの土坑からは、近世陶磁器とともに、約六〇〇点の木製品（建築部材・下駄・漆碗・櫛・箸・扇子・羽子板など）が破棄された状態で出土した。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「＜内山玄□様□□＞」
・「＜味噌樽志＞」

190×38×7 031

(2)

・「 庄や八郎左衛門 三升
後畑村市郎右衛門組」

・「 〔部カ〕 四〇〇衛門在判」

193×37×5 061

(1)は三片に分かれるがほぼ完存している。上・下端に切り込みを入れ、表・裏面と両側面は丁寧な削り調整を施している。表裏面とも一部に判読できない部分がある。

(2)は完存。表・裏面、両側面とも削り調整をしている。裏面は一部剝離しているため文字が判読できない。

これらの木簡は、人名、地名、商品名や数量が記載されていることから、荷札として使用されたと考えられる。

なお木簡の釈読は、元山口大学の八木充氏による。

9 関係文献

〔財〕山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター『掘る 見る わかる 城下町―萩城跡（外堀地区）発掘調査報告Ⅰ―』（一九九八年）

（谷口哲一）

